

相手の立場にはついてもついても

昨日のメッセージを繰り返すつもりはありませんが、一年生が作成したDVDと冊子については、小学生が聞きたい知りたいと思っていることを調査して作られていることに、大きな意味があると思います。「相手の立場に立って」と言葉で言うのは簡単です。しかし、実際にはなかなか難しいものです。「あいさつを返してくれるとよいのですが……。」

下校前にスタンバイしていたスクールバスのドライバーたちと話していた折、一人の方からこんな一言が発せられました。これを聞いて、私は「生徒は運転手にあいさつをしていないのか。けしからん」と短絡的に考えるつもりはありません。北中の生徒には多少シャイなところはあるありますが、あいさつを返さないような横着さはないと考えているからです。これは普通の生徒だけではなく、全生徒について言えることです。

だとしたら、先の一言が、どうしてドライバーの口から発せられたのでしょうか。ここに、生徒の皆さんがこれから生活する上で考えていかなければならないことが隠されています。

ドライバー側にも生徒側にも、互いのあいさつが届いていないのではないのでしょうか。とりわけ今は、非常に届きにくい状況だと私は考えています。

両者ともマスクを着用しています。運転席と乗客席との間がビニールカーテンで仕切られています。バスですのでエンジン音が大きく、仕切られていれば狭い運転席側にエンジン音や振動音が、より大きく響く可能性があります。そういう条件が、あいさつのキャッチボールを邪魔しているのかもしれない。

「私たちはあいさつしているのだから、聞こえないことに責任はない」と考えてはいけません。相手に自分の声が届いていない可能性があるのなら、そこで「相手の立場に立って」が大切になってきます。単純に考えれば、いつもより大きな声であいさつをすべきですよ。声だけではなく、会釈する姿を見せることも必要かもしれません。ドライバーにあいさつが届いていないのなら、届くように工夫すればよいだけのことです。

授業を見て回っていると、あることに気付きます。マスク着用が当たり前になった今、また、換気をしながらのエアコン稼働が日常となった今、以前より仲間の声が聞き取りにくくなっています。「わかりました」という反応の中には、わかっていない、いや、はっきりと聞こえていないという場合もあるような気がします。生徒の皆さん、そうではないですか。

いつもより大きな声をだすことが、「相手の立場に立つ」ということです。優しさは特別なことではなく、こうしたちよっとした心遣いなのです。

(二月三日 記)